

「つつい楽をしたくなる」というのは人間が持つ特性のひとつなのかもしれません。車を運転するとき、動き出した前車につられて発車してしまうのも、安全確認を前車に任せてしまおうという「楽をしようとする」心理が関係しています。そこで、このような心理がもたらす危険についてまとめてみました。

見えているのに見ていないという危険

第1当事者の違反別交通事故発生件数を見ると、安全運転義務違反が最も多く、なかでも、安全不確認、脇見運転に次いで多いのが「動静不注視」です(図1)。

これは前車などに目を向けているにも関わらず、その動きなどの判断を誤って事故を起こすというものです。なぜこのようなことが起こるのでしょいか。

実は、目を向けていることと、目を向けたものの動静を意識して見るということはまったく違うことなのです。目を向けているだけでは安全確認をしたことにはなりません。このような安全確認の省略が事故につながります。

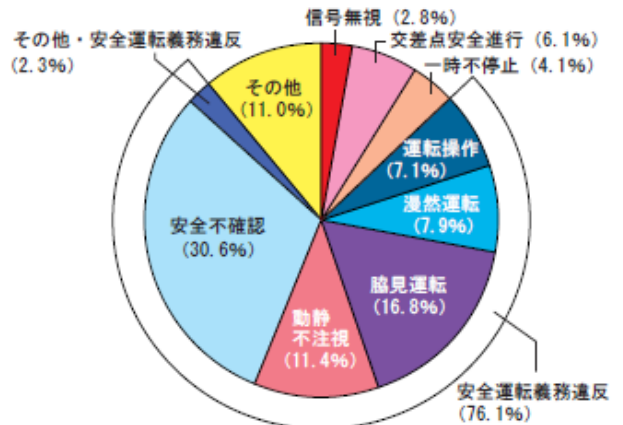
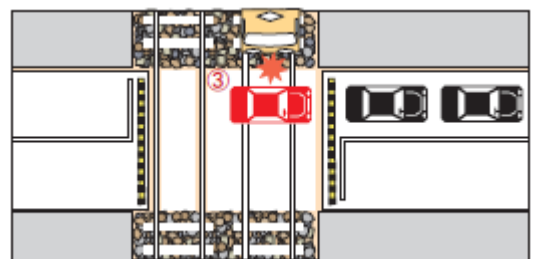
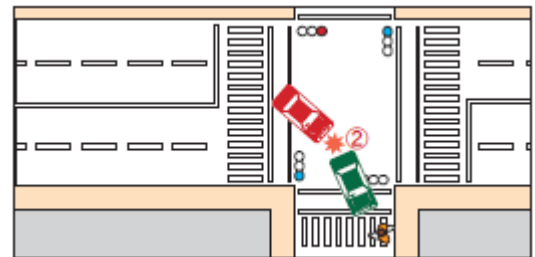
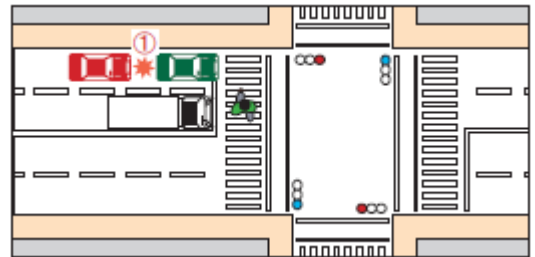


図1 第1当事者の違反別交通事故発生件数の割合 (平成25年版交通統計より)

安全確認を人任せにしてしまう危険

安全確認を人任せにしたために起こる事故パターンをあげてみました。

- ① 片側2車線の走行車線で前車に続いて信号待ちをしていたとき、前車につられて発車したところ、横断歩道を渡り遅れた歩行者のため急停止した前車に追突。右側からの横断歩行者は追越車線で停止している車両が死角となって見えなかった(右図①)。
- ② 交差点で前車に続いて右折待ちをしていたとき、前車が動き出したので追従したところ、右折先の横断歩道を横断してきた歩行者のため急停止した前車と衝突(右図②)。
- ③ 前車に続いて踏切に差しかけたとき、前車が踏切の手前で一時停止をし、安全確認をして発車したため、つられて踏切に進入したところ、踏切の先で前車が停止して踏切から出られず、電車と衝突(右図③)。



また、これ以外にも、停車中に隣の車線の車が動き出したのを見て、つられて発車して追突したり、夜間、前車に追従して走行し、前車の停止に対応できず追突するなどの事故も発生しています。



安全確認は人任せにしない

停止・低速時も自分で安全確認

安全確認を人任せにしたために起こる事故パターンを見ると、「停止状態から発車したとき」「前車との速度差が小さいとき」など、「スピードが出ていない」あるいは「スピードが出ていると感じにくい」状況で起こりやすいようです。

このような状況の場合、油断のため漫然と周囲の車の動きに合わせてしまう心理が働くからです。また、スピードが出ていないことで「安全」と思い込み、安全確認を省略する心理も働きやすくなります。

しかし、スピードが出ているときだけが危険なのではありません。停止・低速時でも危険は潜んでいます。常に自分の目でしっかり確認をする習慣をつけましょう。



前車の周囲に注意を向ける

前車に追従すれば安全と思っていても、前車は自車の安全まで配慮して運転してくれるわけではありません。目の前に歩行者が飛び出してくれば、自車のことなどお構いなしに急ブレーキを踏みます。

前車に追従していても、前車の動きだけを見るのではなく、その周囲にどのような危険があり、それによって前車がどのような運転行動をとるかを予測する必要があります。とくに交差点では歩行者や対向右折車、交差点を通過した先の横断歩行者などがいないか十分注意しましょう。



安全確認の人任せは相手にもある

つられて前車などに追従するのは自分だけではありません。たとえば、黄信号の交差点で1台の対向右折車を通過させてから直進しようとしたところ、2台目も右折してきて衝突するというケースがあります。

また、車が近づいているのにも関わらず、一人が横断歩道を渡り始めたら、つられて渡りだす歩行者もいます。

運転はお互いの信頼に基づいて成り立っていますが、相手が必ずルールを守るとは限りません。「2台目の対向右折車も出てくるかもしれない」など、万一の事態を予測しておくことも大切です。



「ご相談・お申込先」

阪急阪神保険サービス 株式会社

〒530-0017

大阪市北区角田町8-47 阪急グランドビル16階

TEL 06-6232-8897 FAX 06-6232-8809